

授業科目名	アフリカの歴史と社会	単位数	2
担当教員名	朝田 郁	担当形態	単独
実務内容 (実務家教員の場合)	研究者としてアフリカで複数回のフィールドワークを実施してきた教員が、アフリカの歴史と現代社会の特質について解説する。		
<p>「学位授与の方針」との関係</p> <p>アフリカ社会の歴史と現在を学ぶことで、そこで暮らす人々と私たちが、共に地続きの世界を生活していることを理解し、学位授与方針である「共生社会の創造に貢献する姿勢」を身に付けることを目指す。また、現代的な共通課題について知ること、「自律的な課題探究能力」の習得も目標とする。</p>			
<p>授業の到達目標及びテーマ</p> <p>(1) アフリカの歴史に通時的に触れるとともに、現代的な共通課題についても理解する。 (2) アフリカと他の地域を結んでおこなわれてきた、地域間交流のダイナミクスを学ぶ。 (3) 植民地的歴史観を相対化する一方で、アフリカを弱者に描く姿勢からも距離を置く。 (4) アフリカの人々が、私たちと同時代かつ地続きの世界を生活していることを実感する。 (5) 報道で耳にするアフリカの話題について、背景を多角的にとらえる力を身に付ける。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>みなさんの持つアフリカのイメージは、どのようなものでしょうか。アンケートを取ると、未開社会、貧困、野生動物といった言葉が頻出します。日本のテレビや新聞などで、アフリカ社会が扱われることは少なく、ニュースでも全報道量の2%に過ぎないという研究があります。なので、アフリカの人々が歩んできた歴史や、また現在暮らしている社会について、思い浮かべるのは難しいかもしれません。</p> <p>この授業では、新しい視点で編まれた「アフリカ史」の教科書を読み進め、文明の黎明期から現在までの流れを学修するとともに、現代アフリカ社会を形作る、多様性や共通課題にも注目します。さらにスクリーニングでは、アフリカ社会に暮らす人々が私たちと同時代を生活していること、またこれらの地域が私たちの社会と地続きの世界であることを、身近な事例を読み解きながら学びます。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：アフリカの自然と生態環境－アフリカ史の舞台・文明の曙 第2回：流域社会の形成（1）－コンゴ川世界とザンベジ・リンポポ川世界 第3回：流域社会の形成（2）－ニジェール川世界とナイル川世界 第4回：人々の移動とネットワーク（1）－サハラ交渉史 第5回：人々の移動とネットワーク（2）－インド洋交渉史 第6回：大航海時代とアフリカ－大西洋交渉史 第7回：植民地支配－ヨーロッパ来襲・支配の方程式 第8回：抵抗するアフリカ－抵抗の主体とパン・アフリカ主義・ナショナリズム 第9回：アフリカ諸国の独立－独立の光と影 第10回：アフリカ社会の苦悩－20世紀末のアフリカ 第11回：成長するアフリカ社会－21世紀のアフリカと未来 第12回：聖なるものと人々の暮らし－アフリカの豊かな精神文化 第13回：アフリカン・アートとメディア－カルチャーとコミュニケーション</p>			

第14回：アフリカ社会が抱える課題—現代アフリカ経済と紛争

第15回：世界・アフリカ・日本—地球社会の一員として

定期試験

スクーリングでの学修内容

教科書で学修したアフリカ史をふまえて、現代アフリカ諸国が抱える共通課題や、社会が内包する多様性を学ぶ。講義では、信仰を通して見たアフリカ社会（第12回）、アートとコミュニケーションを軸にしたメディア状況（第13回）、20世紀末から現在のアフリカ経済の変動と紛争問題の背景（第14回）、国際社会におけるアフリカ諸国のプレゼンスと日本との関係（第15回）をテーマとし、身近な事例を通して理解を深める。

教科書

(1) 宮本正興・松田素二 編 (2018) 『改訂新版 新書アフリカ史』 講談社

参考文献

(1) 松田素二 編 (2014) 『アフリカ社会を学ぶ人のために』 世界思想社

(2) 北川勝彦・高橋基樹 編著 (2014) 『現代アフリカ経済論』 ミネルヴァ書房

(3) 松田素二・津田みわ 編著 (2012) 『ケニアを知るための55章』 明石書店

(4) 明石書店から刊行されている『～を知るための...章』(エリア・スタディーズ)

学生に対する評価

スクーリング評価(25%)、レポート評価(25%)、科目修得試験(50%)を総合して評価する。